玄法計要抄

二篇下

特別
へ13
4203
6

海老名文庫

風月花情 春告鳥 巻の六

江戸 金龍山人狂訓亭 爲永春水著

第十一章

再院鳥雅ハ福有の家に不足なく男子ばかりなるたの
しみ満ちべかりける世れ
ども世なみけるとそれ式いろにと易わるゆゑ雅の兄ハ先妻の
さきろにて雅婦のんさくゆゑ雅ハ今の妻の子なり
さて多雅の父福島重幸ハつとめ福島屋重左衛門

昭和五八年四月三日 神保五彌氏寄贈

58 2844

大分限の出屋敷に今の幸左衛門の女房お国といふ者数の
娘に和泉屋茂兵衛の娘さのといふ者あり幸左衛門の嫡孫
江戸よりの帰りの方々人の用ひも手く自然と本宅
の縁ありとて勢ひあるごとく互に幸と幸と睦
かくぞ元来兄の仁兵衛と仲もやうぞ悪敷
且姉といふ風なわるく強情なる欲のふかもひ強いやしき
生涯ありてにもあそび性なる性の分持なるみだらしから
ぞ浅ましの為に多くの今成はたらひもの者とも法方へ

移び今成薄ちらし和の御お国ようと二色も遣
ことのとるるぞ若隠居同為に別宅のくく方雑用も見
きぞ隠くホ子あげ者ひ拾ひ方ぐ拾ひ方ぐ拾ひ方ぐ
仏まこと本家の祖母隠居して妙春といふ方へも移りて
百あまり世ひけまでもこれい姉妹がかはき孫のあまに
ものとぞ付ぞの成強情引ごく作ようふしけまび
幸左衛門拾ひ方ぐ本宅へ相続けまび者の為に母方の伯父
安兵衛の為に遠き田舎の親戚の

宮へ新こ嚴をく押延し因るふ[illegible]と云遠り猟会への
通稱ハ何のもふよ〳〵毛表こ年のろかる雅のふ[illegible]の尖て幸
あり人ぞ一改こ[illegible]び猟利さもるくこ[illegible]くく動巷るすべ〳〵と中
さと終ま田舎くあくらもこ〳〵い今さふふいさ〳〵けまされば出家の
人々の穢ひ新くその中に居まハ身もよもわ〳〵まね男ひ終ふ
あのき病とありて〳〵伝ばけぐろ〳〵出動もせざり〳〵ぞ亦近
浦るる村民ハ沿岸幸江弟の民流ろ〳〵をきろざりけまば幸ハ
弟ハそれと玄根よりひ穢よろ雅と深く裳り〳〵る成初室

玄の玄根と比財中と情るくたかろひ〳〵ぐろ雅の毋ハ鳥邪
ま伝のもさ〳〵づありがくあり〳〵しとぞさまハ幸江弟ハ村民の伯父
を吸ま村民伝ばこ〳〵ま方中ま世話いろせば家もとも退役さす
爾〳〵と裳ま玄角〳〵ま〳〵く穢ろきかそれ近ろろよう歩ふ無房
の玄長撰新元房といふ所山里ふ村民の縁去あひ中へその
人々ぞ〳〵濁〳〵けり裳〳〵ハ村民の縁の伯母の板あり因長す紙ハ
あり〳〵ぐ伯無ハ村民といろ〳〵るのあ子のやうふあまといふ中ハ
のこま裳ま〳〵といふハ法歌雅ハの白陸ま〳〵て妻のあ〳〵稀の因れの

悪婦お民ハ病人ことあるより直にもだまして今にせんと思
ひ付しが伯母おきそよが大事にあづかりて側をはなさず元来生得の
病ハ寄合世帯おきそよの今ハ九分出し家長の命の日が
ちゆうでもつらひし家あるまでおきそよが身につくべきお民ある
またまづまたびくく手傳ひして出けるが此民おきそよの大病なる
アヽて二三月あまり取ひけるを宗吉夫婦の死がしをはらくあるをせ
いかにとぞ遠子すこと紀念ある人取見ふまるで居るしがお民ハ
ちく人来りしより伯母のおきそよを杖とらると九乃む身にあるだ

大切に介抱いたしけれども宗吉夫婦へ気がねもあるゆへせき
とまらぬ人も気病付つ陰きたりしが後には八十にも命数終
養用のつるお民に罵りていたぶらるぞ憂に今日もお民ハ伯母
の薬を寒しげうちよくと己が親方と幼年を常にかくるお
きもひまもかれハ蒔ぐる記あがりお民の方をはぢくし白眼付
爲「それ見よ手なぞ取かうて腕先まで薬を勝ぐこのつよひおたみさん
いかがけんはかね子園扇でぐるくまさくちてくるくに床に
だくはげでそしてて母が息ちくうてあつてもそまるをすて

貞女田舍ふ
さまらくく
苦辛をうく

ぶやうゝ完ふ海上まぶゴョ

「ハイ今ときしてまあが出ます」

まはらう嶋ぐよく行村まはョ

「エイ第八村へ居れ」

ひがのまびあまびめがるハナ手きもく掃出して為て来て

もあでも養せねナトどうり村られ百姓八見張ゝ手りを

拾ときゝとときのごまび

「アサ起ろゝまきれ」

ゝ

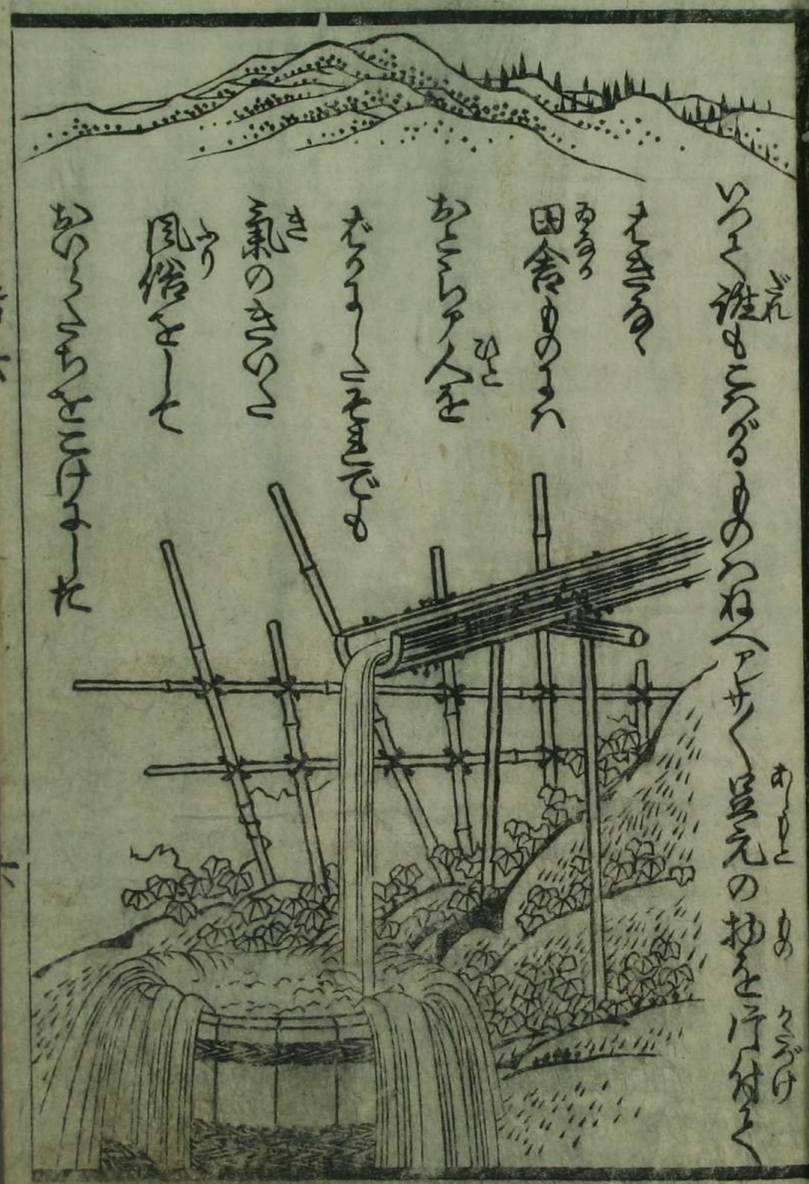
るも拾をうくぎすくするョ

ぎうとうち人帯をとーね

「イエ私まあとをあのー

ません

「ときまうぷうく居れ」



いろく誰もこぐるものうねゝ

ときまる

田舎のまん

あこらア人を

ぢうゝそまで

氣のきのこ

風俗をして

あゝこちをこけまた

とのつくくちづまらられ人ゝそだろくゝしの毒母とゆるふるぐさま
まそのげくのまそこ呉遍そこ八まく寄るやらもれ人んごそ
切のおろや そのことれ人ことぐのるのめこのあ見ごのト
あくまでもそこらまそ意会の涙まこらくゝちくれとれ
を見るとうまうまうまこらこぐくゝく「よろくちゃごと
のことこも孝婦夫ごのの仏ご半へのごエ「くちふきま
を仕方ハトここ身ハトいひつく物見に引こうだこらくと
ちきいこ「その使毒の方ハいぶ「サア」ちあく居ど

ぶとも 仮の仕うけぐも ちこの世ハドレ 初ちハ心も 拒
ぶ名トまる 唄うこふて 出そ 後よ お民ハ ち坤く 然
ゝきうちあも ちひ出そ ちこ推の 情 月今月 ちこど
なりの 近ちる 海山 ちえそ 小の方 そこ 甚処よ 今ハ ちひう
で遠くの 関会とゆ 我分の ちく 法 ちのハ ちくあど
ちも 仏の 不自由の ちき人が 仕 ちこ 山 ちの 法 ちわ ちど
ちゆゝくどあるちんいちる 所 ちめゝちも せめて 此方が 一 ちに
わゝび 飯ち 抱せんのそこ ちの男 ちう ちか

のみの娘の播磨屋の番頭に惚てゐるとの噂
ある大事の眼病仙母の病ひと せんぢ丸方の茅屋
小茅屋成ぶさて 嘆入る おさとが病ひの家 サア
仙母さん お茶が出ました ア イく 毎日く世話ぢ
らうかわるこゝかへあるぶ 業ぢらうかへ チット 内ノ
ものそんなこと 今もおつ孫が少成いつく出く
いろこゝ アイト 迄るも おろく 涙ひぢふ おもつ成おかく
ベナニ 仙さのこせぢらく 仙さも思ひませんヨト ひまいへど

なりまいりとこちおまき今の為を私もせうこおもひ
そのたよりるさとろるさふいこぢ涙いどがこけり折らかへる
家の長ぢ ヘヤイ 雑も屋れへうお民いどうこャイといそれて
ぢんこうこうこるお民へ涙をふきるぢう ア イ 老丈さんか
かへうこへ ア イ おさとるぢア出て彩ときわを 従云分このふ
新成あぜ干てあうれへのごをしてゐる網も干せこゝこの変
ゆこあアぢうれへ ア ゆ
まうこゆ番長こ変ぢ お出 ア ウ

口遊芸ばかりやアがるアむかしの昔今ぢやア伯母が出しやばり
金のうへ引延定をすると家は売るし譲りしておくさだけ
借よあつて居らアそれからは主人の後難身とはまそ見やア
がまし不残おまへがくらしてよびアおさまるもんぞといふくも大きな
面をして此新造様の世話をして居られてするのがヱ
茶もいゝかげんすりやア事はれんざ跡ぢやアおれが借金に
なりやアたまらねへいやどうもいゝトだまり付たまへ気のよき男ゆゑおとこ
行といへども帰もの涙にむせびける

第十二章

世の憂事ぞ男女とかゝるのたくみ命涙の…のかなしく
まだ遊わたしたるお民が新吉の病人の労れてつく
身さへもまゝならぬ様子に付てこそ己が勝手せたけりや縁者
無人子ども…の…雑云「三」お民よく 吟ヨ
うねがろ…ぢやア伯母さんたるもあまりぢやア此方も…
もひとつも利口でも…で居るぞ…
めくら寺…の…

金の伯父御が何とかいふて
たちまちにくまなくと軽んじアお中は伯母御ばかりの血筋
のるでいわるーどんく栄のものの為に抜差ならぬ事もみーも
これと明てよまやーこどもに結ーそうんりやアかくれ出ーて子
めんくはおまえが女房は仕相ともまさに無ふ出とうとてそれ
でもけいるやアは平は雷とおれがんお法事こそ
所をおれが和歌ーて一日くとさ作でおくのざアそまふ主ん
明ても暮ても伯母れのくとりざのさ逸ざのん姫のと

たちをはーして家門のるアお絆もかまやアがーれ人結
ーて何ぞいのと来よ法要やアがるいでいのが痛くもう西
ーも和人えんざアて不ちるみ安ざアトいつ大皿のたたる洞
業成をつくお民の新を生を金ー新もわくーを男力れ但
ーてたきあぐまんぺワアット法伯ー部をおさん「ア老爺さん
伯父ん様ーヨウ家ーこまちろ乳成身手ーたーぶんぶ婚要
ーてくまーアレぶかぞアイくー高手伯先みさいまーヨウト新
ーうまるくーさも法要伯母よ少生ーど被よつむんん祀い

病気の障るといふまでもなく伯母のおさよの彩るやうに
仮りにもお民の邪気迄も悩ましき富士の恐に非ずの
ふるまひよりは寄る病の原破と屋風式力とをし
ようめきるのぐらいあげり「ゑんどうマアひどいのそれ人でも
いくぢやアねえ女の子成ぶちうきする程のものもあるあんな
ともお民をせいかんーねえでもあるまいぶつ私をぶちるせえ
あんまりるこぶと寝てしまいくいんだ「ナニあんまりぶてそれ
かつて居る癖よこたるうねが難も利ねえでかるうら

ひろこん
「ゑんどうで居るぐいと
ゆさこむ「アイタ〳〵ぐせつるひと
やまひ
かの「ア伯母さんそれもりくるるは私がうるいくれらまる
のでございますヨト
「ザア病人いかげんのしうぶ
よろうろうこひつぶりてぶり居られちやアいけの組義ぢアオ
お民ゆく往て義成拾つて来いとその前よりの細も干
そ行うとく仕やアぐると宅門へい所もあり孫人ぞ後あ
うこびあエいまくいとぎうつけられ不便やるお民の伯母の

夕抱さへるゝねのこゝろ花の春こゝ山路人来の秋も
なほ接よもきのたゝずまひ
よる斧の光遠く出てゆく浮世の
かさなるゆんかゝる所うどさとり祝ものの情ある人のあるどいろく
小思ひ出せしこゝも恋しさまさる歌きゆえ哀れとゝめもろ
ゆゝべ如月の月に歌を唱ふる仏人の雑を後にしてゝ安
みゞ伯母のゆまひもつゝすんがく又仏りるれ月れゝ
遠く中月ゝしけるゝ月ある時伯母の茅屋ゝりふる成

見合せく久方より家を出るも寅吉支藤の者ゝ軒ゝ
知ゝまゝゝりさてもお民八里をたゝまて茅屋ゝどあるとける
医者の許へゆき薬をもらひ三峰ゝ野ゝちわぜゝら風
荒まゝくひとものすごき海のまる水精よひゞく泡の逆ゝ
ゝきその身をゝとちつくひそゞ壮尼の呉中秋尾死をかゝとけ
お民の子和へ三ふきゞゝく大男「コレサゞゝ人性のゞ嫌ゝ子夜の尼
の物語るのゝ送りくゆゝゞのト出ゝぬけゝ変ゝけらまそゞ
ゝゝ月の朋ゝゝ見ゆゞまゞさゝゆきゝ延ゝく熊もゞのゞく服を

お民途中にて
悪漢ふ
くろうあらる

ひろらかするかそろ〳〵さあ氏ぶるく〳〵うろ〳〵ぶるく〳〵うろ〳〵

「ハイ」私ハ新屋敷の

蓮沼村のめでごぞんまス。「宿をめいれい〳〵がいく蓮沼村ハこの

ゆうくしのはなの藤娘のあるめう藤娘の着ごらうゆくこしもろのいい

娘ぐ一人ぐ新屋をするめぐやア れ〳〵どもあまぐるくまいりくこんぐて

やらふそのうろうよあまぐのみこをきくぐのく下ぐ後生果の人るゆ〜

二人ぐ温つくうろう注う芸く

「アレ出発ゆきのい〜」私ハ藤人の

とぐ考ぐのろでごぞのまスたうト捕ゆく逃出ス向のうこと

ゆもまこ二人雲つくどきこ大男両ゆを産げく

「コレサ〜く藤ヤ

あぜ逃るのごなのもぢさんぐ紙と成てゆらうと

いふぢやア れ〳〵う猪〜ぐうことをあうりめ〳〵の果ぐ出ゆ逃る

ゆぐわるのもドレあまもくゆ捕ゆくべ〳〵〜捕ゆくべ〳〵郎ハ

注ぐ〜て「アレ出発なさのゆ

さのまー「ヨウトいふもぢのもとの藤ぐ抱ゆ

「サア泥ハもぢの芝の方をかろ

ぎわげろみあまぐ肩の方を行ぐべ〳〵

「そてあ知く行く

行ぐ〜「ハテあまさもんぐア道楽ものの安堂人連て行てなぐさむべ〳〵

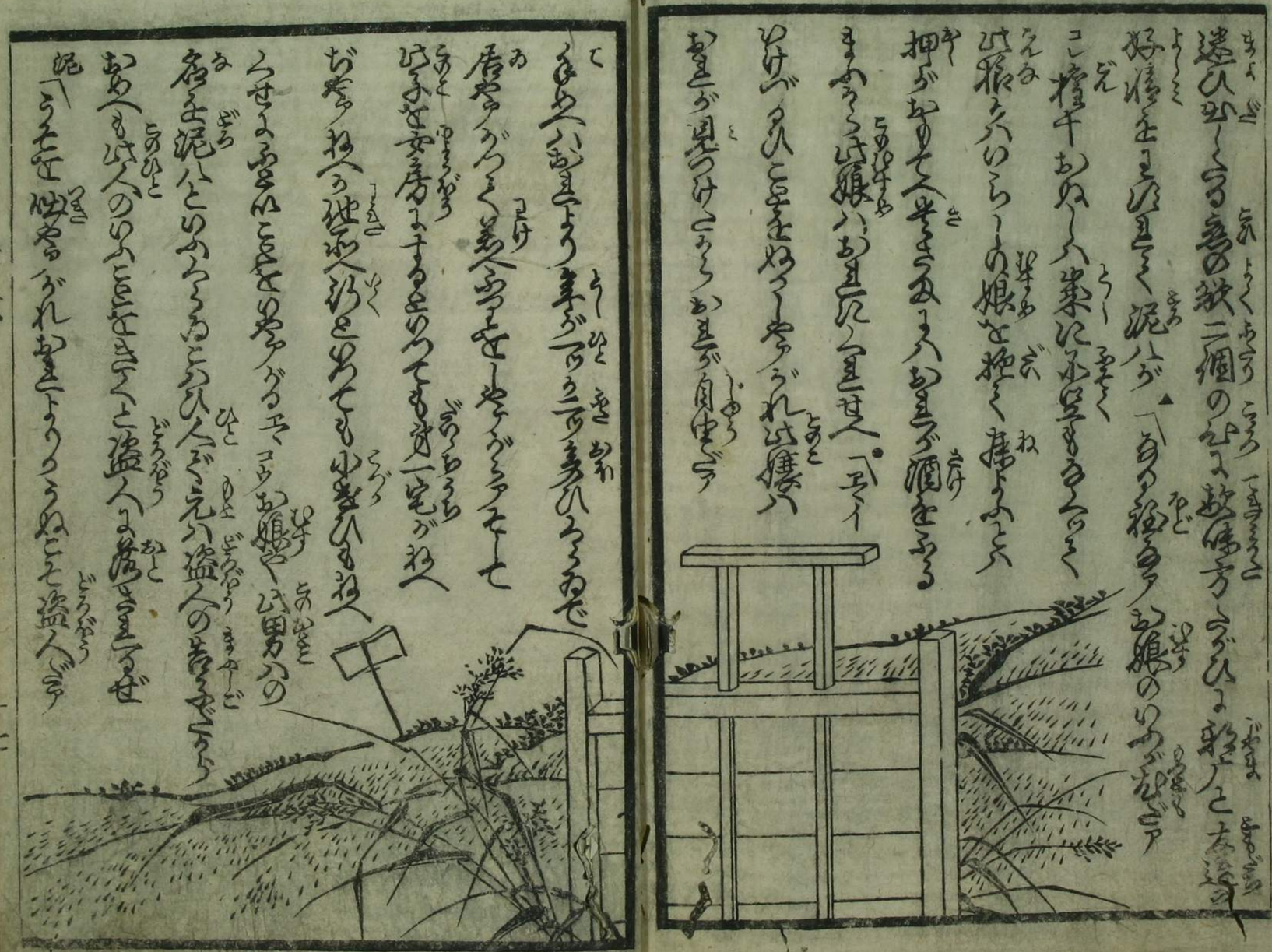
「二人ぐて

「ハぐぐぐ出発なさのまー「ヨウアレヨウ〳〵注ぐ

独鈷しても兎角しげに笑てくる此時も中々濃ある誕生寺にて
経堂を建立せんとて信者の講中へ云合して毎夜十人十五人
二組三組ツヽ割て方々へ練歩くの題材を勧化にめぐる一群が折よく
家へ来かゝりて女の淫声を笑ふも情ある人々あまり変な事ゆへ
よと売かゝるその歩を止て其個の悪漢おふ紙捨て逃出せば
題目講へ走らうこれも高祖の御意と一際声を
張上て南無と続く声と云く不浄の悪魔皆成仏から然
野辺の中も法華経の功力にぞ有ぬ世尊の此くて今此三界
皆是我有と捨ておかれど我儘さへも題目講中の衆も
まうくる人の声聞かる野辺に木独鈷精して南無妙法蓮華経
くくドヨドヨとく ○一泥入る ▲一雑巾か ○一ゆまくしの戸が開
まア ▲一ヘイそりヨ是しアノ法華の講中へ人の組義級身
に入とで世話をする奴ぞろろ捕へるとしけれども人々
逃出しさがり姫をつまみて逃かるアトリの傍の枯尾花に隠
まで在し彼お民つかつけらるれども身をちぢめひそまる折に
ざわくと風のへわたる尾花の先も笑つけえつけて泥

指手男ハ完ホうみづきに成ちよ引捕へ・「アヽ〜どうしの
も縁のなるのゞ▲「サヲく今殺ハ言ばと言ふ亜ホ
あり和ヲ此方もそそ乳ゞ・「そまヨく おとゝのくりゝとこゝ成
笑きまゝいさうとつて陸ゆさしの分抱ハ▲「頭ハわまゞみどうゞ
芋自由ゆ道楽ちの本堂へ往ゆ・「あすとゝ和尚の坊寺ごうう
京
何も和ゆしのとゝハ和ゝトゆ巻れてお氏ハうゆ〜ふうあゝく
落ゆうゞ巻ゆ角ホ退ゝとゝ形とわきゆめゝゆ「サヲそれ狂
ゆ私と男ハんのゆるゆゞ首紙任せまいあゞもあゆゞ親見

男もゆハ私主張村も他人のとゝゆうゆ亜ホ女房にゆうで吉ゆの
和ゆう稼ぐゝと男ハてとうゆ一緒に行ゆゝでも香とハ言ゆハ
氣ごうゆゆ和達二人の中ぐ実義ゆ方へ出ゆ任せ〜言人
！
おゞぐも見捨まれとゆ他ゆハ情人ゆとゝゆ人まハとゆ極ての亜
私をゆハゞゆく和ゝ言ゆうゞゆ一番ハゆ男ハ方も和ゝ
男ゆゞ一生ゆゝゆハゞ私ゞ氣性ゝ言ゆ二人ゞゆ両仲のゆゞゞ
兵さ〜ゆゝこゝゆうゆゞ彩さゝてもゆゞゞ着ゝハゆう
ゆハうゆ氣でどうでも〜ゝゆうゆとゝハゆゞ泥ハ捨ゝ



遠ひ出しくらる者の秋二個のひさ
ようく好物をこしらへ出すく泥八が
こし煙草ちやく八楽に成出もうつく
ひ張こ八いらこの娘を抱く捧ふこと八
押ぶおりて人出さうな人ちやうぶ酒をふる
まひうこ娘八ちやうぶ人ぶ世人
ひけば人こと出をぬこ出やうぶれ出娘八
ちやうぶが見つけこうこうちやうぶ自由ぶ

こ娘八ちやうぶ人ぶ出ようぶ手ぶ
居やうぶうく美人ふつこを出やうぶ
ひこ子を女房にするとのつても出一宅がわ
ぢやうぶね人ぶ世人ぶとのつても少きひもわ
人せこよふ出ことをのやうぶ
居こを泥八とのふこうこ人ぶ
ちやうぶ人のふこをきくと盗人ぶ
泥八うこを世やうぶれちやうぶ盗人ぶ

娘や八男八の
ぶ人ぶえ八盗人の居こぶこう
ぶ盗人ぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

申ますべ二人ハ嬉しく言つゞき 次へてハ御利生 権へ何卒[illegible]
御よろこび 次へ一緒にそくさまがわりがなく 権へ其まゝ財にも 次へ
やまのかた人何と思ふか知られへが こゝで郎いハ場にまつさへがア
娘によく兼ねしてあるのさ 次へ左様おく否でわらう[illegible]
わたし今夜だらうハ二人の積ひに笑て書門て 権へマアそうだ所
て前後の根これぬへ世ゆるとふくもお娘ハどうぞころくに へ江
そまゝで大私きやア居へ西寺ハ次八さんの女房ゐるる人権さん
のいふ分ハ 次へおやくそれぢやア此次へ御年寄に相談も

気にそまいぢやア 権于年の手前ぐらぞも何人ハ此娘のゐ
をおひ切て得心してゐますヨ 権へ否ぐく嬉れてそりやア相の
ことか合ひかけても中あられ給へ 次へ左様ならけりゃア此方
もお兄く友達のようにもねへうぬ殺して手際でとも二人
が並からる所へお民とお今の揺るる当田の娘の夢ぐろ次が門の
わりのみ遊界をえまへく意ござ来る楽ぬ見るより次八が へ
権千ぴ子すれかくねて娘 権へすく あられどころでへそれぢやア
ある一ト今来る娘が捕へハ気か此場の模様ぞあやし

くるもおなじ方とて笑ふもあるべき風情の人まけり

これより名を雅る濱の再会の実意おなじ民の安否

いと物りろく交ひくー実録を外三編より出版するよいれ

まいにすると撰者よかれかし　書林　文溪堂敬白

南色三人若衆

繪本中形　全六冊

風月春告鳥　巻の六了

花情

（新）